
Dear My Future

湯たぼん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear My Future

【Nコード】

N6178S

【作者名】

湯たぼん

【あらすじ】

親愛なる我が未来へ。筆者自身が理想とする未来像が舞台です。国の境がなくなり、精神波を用いる事により、さらに便利になった社会で起きた大きな事件とは・・・

序章

31世紀。

人類は彼らが思っているほど愚かではなかった。

第二次世界大戦後、小さな紛争、核問題などによる戦争などを経て、世界は一つにまとまった。

はじめは科学から。

ドイツの医学研究者を中心とした世界規模の巨大な科学同盟”アインス”が発足。

その後全ての分野の科学者達が同盟に参加し、医学から教育までを含む全ての科学、学問をアインスが行うところとなった。

2

アインスに引き寄せられるように各国の首脳も歩み寄りをはじめ、話し合いによる統一国家の設立という史上類を見ない事態が起こった。

アインスに反発する国々との長い、大きな戦争を経て、ついに人類は完全にひとつにまとまった。

国が統一され、政治もアインスの専門家が民主的な投票により選抜され行うようになった。

全てが統一され、食糧難、貧富の差も次第になくなり

何よりアインスの研究による科学の進歩がめざましく、全てがうまくいっていた。

”精神”の力までも応用することができ、人類はほとんど体を動かすことなく快適に生活できるほど進歩した。

しかし、研究には常に危険がともなう。

クローン実験をはじめとするリスクをとまなう研究を一般人から隠し、処理するためのアインズ専用の軍が設立された。その名を”ツヴァイ”という。

設立当初はマスコミへの睨みや一般人から研究内容を隠すための隠蔽工作などが主な任務であったが

研究が進むにつれ危険なリスクを伴う実験をする必要性がなくなり、ツヴァイの意味もしだいに薄れていった。

3

が、しかし。

3015年8月、その立場は一変した。

謎の現象が都市を襲い、その都市のすべての生命が奪われるという事件が起きた。

ツヴァイは、その隊員のほとんどを失いながらも都市に侵入し調査を行った。

都市では、”実体のない存在（この時、ソレはヒトの姿をしていた

と伝えられている)”がほぼ無尽蔵に次々と現れ、それに触れられた者は力を吸い取られ衰弱し、死んでしまうという信じがたい現象が起きていた。

それは全く”未知の災害”と位置づけられ、アインスの最重要研究科目となった。

全く対策を見出せなかったアインスはパニックを抑えるため即座に報道規制をしき、最初の被害地が孤島の都市であったことも手伝って”ゴースト”と名づけられたこの現象は一般人の記憶には残らなかった。

ツヴァイは、当初対処不可能とされていたゴースト現象に果敢にも挑み、多くの犠牲を払いながらも

ゴーストは当時研究が進んでいた精神波によって対処できる事を発見、精神波による攻撃、防御システムを確立した。

ゴーストに効果のない火器を一切排除し、全隊員に精神波保護スーツ及び精神波攻撃武器を装備させ

ツヴァイは格闘を基本戦闘方法とする対ゴースト専門部隊と化した。

加えて、アインスもゴースト対策を最重要課題として研究を進めた結果、ゴースト発生地予測システムを成立させた。

ゴースト現象により結びつきの強くなったアインスとツヴァイの連携のおかげで

この恐るべき災害が一般人に知られる心配はひとまずなくなった。

そして3034年、再び人類は転機を迎えることとなる

その1

その日、シュロは何年かぶりに神に祈っていた。

「くつ・・・いい加減どうにかしてくれよ神さま！」

迂闊だった。何もかもが迂闊だった。

正拳に突いてくる敵の拳を受け流しながら敵の足を払い、水月を突き上げる。

そんないつもの連結技でさえも焦りと疲労で妙に遅く感じる。

倒れた相手の顎を踏み抜く。かかちに嫌な感触を覚え・・・そして消えていく・・・敵の姿も薄らいでいく。

だがその直後、気配を感じて振り向くとさっき倒したのと似たような人影が虚空からうつすらと、だんだんはつきりと現れる。

ゴーストだ。

振り向いた勢いそのままに体ごと旋回させて後ろ回し蹴り、そのまま反動で正面のゴーストにも裏拳を見舞う。

愚痴をこぼしながらも手足は動かし、周りのゴーストを蹴散らしている。

対ゴースト用の武器がないと実体のないゴーストは倒せないため、シュロは拳に精神力増強武器：ブレイブ・ナックルを装備している。赤い髪を逆立て、精神力増幅ブースターとなっているペンダントを

首から下げている。
やや背が低いががっしりとした体格をもつ、シュロはそんな男だった。

「ったく・・・これだけ大量のゴースト現象が起きるつてのによりによつてこんな時に予報を外してくれるとはね!!」

となりで同じようにしてゴーストと戦いながらモクレンがぼやく。彼は日本人だった。もつとも世界が統一された今となつてはそんな区別すら意味を持たないが。
黒髪を短く切り、こちらは精神力増幅を額にまいたバンダナで行っている。
軍から移籍してきたモクレンはマーシャル・アーツの使い手であり、彼もブレイブ・ナツクルを使っている。

「何ぶつくさ言ってるんだ!そつちでまた沸いてるぞ!!」

銃を持ったイスカが怒鳴る。金髪で眼鏡をかけている、知的さを漂わせた長身の男。
集中力をかわれてこの”ツヴァイ”にスカウトされた彼は珍しく、特に扱いの難しい精神力を射出する銃：サイ・バスターの使い手だった。

しかし援護射撃の立場でありながら彼までもが接近戦をしいられている。全くもつて迂闊であった。

戦闘開始からもう3時間が経過している。ゴーストの沸きには時間差があるものの、それだけに休めない。

上の指示で張っていたゴースト現象地点が間違いだと気付いたはいが、そのまま装備も整えずにこの大量のゴースト現象に突っ込んでしまった。

しかも今回のゴースト現象はやけに手ごわい。

普段ならば見た事もない獣のようなゴーストや意味もなく殴りかかってくる、原始人と猿のあいのこのようなのがせいぜいであった。

今は違う。黒装束の上に武装し、明らかに訓練された感のあるゴーストだ。

武器も体力も格段に自分達が上だが、沸きが異常だった。大軍と戦うことに慣れていないシュロ達は消耗も早い。

状況を分析してシュロは目眩を覚えた。あまりに悪すぎる。

ブーツにも仕込んである精神波武器で正面の敵にかかと落としを決めると、後ろから声が聞こえた。

「シュロ！こつち片付いたぞ！」

振り返ると、接近してきていたゴーストを全て消し、イスカがサイ・バスターを構えていた。

小型のバズーカほどもある漆黒の銃：サイ・バスターは扱いこそ難しいが、使いこなすことができれば戦闘において非常に役に立った。銃の調節ボタンをまるでサククスでも演奏するように操作し、イスカがあらためてサイ・バスターを構えた。

彼が首をクイツとひねり、合図をするとシュロは急いで相棒に向かって叫んだ。

「モクレン！」

正面と左右、3体のゴーストを同時に回転蹴りで仕留めたモクレンが、後ろを確認するまでもなく蹴り足の方へ側方宙返りで体ごと飛び出した。

シュロもそれに倣い、反対方向へ体を転がした。

「いくぞっ！！！」

イスカの気合の一言とともに、サイ・バスターから射出された彼の命の光が戦場を激しく照らした。

目がくらんでいたのはほんの2、3秒だったろうか。

シュロが体を起こして見回すと、山の中にあるその街は何も変わることなくそこにあった。

21世紀初頭から続いた大災害は、交通網整備の急速な発展という皮肉な恩恵を人類にもたらしていたため

山奥のこの村にもしつかりとした建物、整備された道があった。任務でなくここに来たならば、その白い建物が続く町並みを、美しいと思っただことだろう。

サイ・バスターの巨大な光柱が通り過ぎた後も、それらは変わる事なくそこにあった。

イスカの精神波を射出するこの銃は、対象の精神波を打ち消すための武器であるため、生体以外には全く影響を及ぼさないという便利な面があった。

もちろんシュロ達はこれに撃たれれば精神波を打ち消されダメージを受ける。そのために呼吸をあわせて退避、射出したのだった。

「う・・・くそ。頭がズキズキする。」

全部消し飛んだらうか」

イスカがその場に座り込み、まさに命の力燃え尽きた様子でつぶや

いた。

最大出力でサイ・バスターを放ったためしばらく戦闘は無理だろう。

「・・・いや。本当に今回は特別のようだぜ」

道の向こう側でモクレンが体を起こすのが見える。

予感していた事だが、シュロも頭をめぐらしてその光景を目に入れた。

「まだ来るぞ！」

イスカの銃で全て消し飛びはしたものの、ゴーストが沸き続ける現象は止まらなかった。

その2

「イスカを守るんだ！俺が前に出る」

シュロが跳ね起きて前方へ飛び出しながら指示を出した。

しばらくの間、銃を撃てないであろうイスカを守るため、モクレンがシュロとイスカの間で守り、シュロは最前線でゴーストを蹴散らし始めた。

彼の蹴り技には定評があったが、シュロの足はむしろすばやく体を移動させるのに秀でていた。

素早い体さばきでブレイブ・ナックルを振るい、正面のゴーストを次々と殴り倒していく。

「うは〜・・・さすがにすさまじいな」

シュロが全て倒してしまっているためにやる事がなくなってしまったモクレンが感嘆の声をあげた。

「射撃専門の俺にもわかるよ。さすがにマーシャル・アーツで軍No.1だったお前の師匠をやるだけある。」

まるつきり疾風だな」

イスカも座り込んだ姿勢のまま同意する。

確かにシュロの動きは風そのものであった。

踏み込みの勢いそのままに拳を叩き込み、側方へ体当たりするかのようなボディブロー。

かと思えばアクロバットのように体ごと回転させ、裏拳で2体を同時にあの世へ送り戻す。

ゴーストでない人間を相手にしても一撃で殺してしまうのではないだろうかと危惧してしまうほどの鬼神ぶりであった。

しかし、ゴーストは一向に減る気配を見せなかった。

「 どうするシュロ。ゴーストの発生地点もわからないようじゃこの先俺達が不利になり続けるだけだぞ」

イスカの冷静な分析がシュロの頭に痛い。

ゴーストの厄介なところは強くなり続けるところにある。

周りの生物、大地、空気からも存在の力を吸い取り自分のものとし、具現化していくのだ。

シュロ達のような専用の装備がなければすぐに吸い尽くされて死んでしまう。

「 ……！ヒソカが増援を要請に行つて1時間くらいはたったよな」

「 ……ああ、彼女の足ならもう増援をここまで誘導してるはずだ」

後ろにいるイスカが同意する。ようやく回復したらしく、援護射撃につとめている。

隣のモクレンが口をはさむ。体がうずくのか、イスカの護衛役を早々に放棄し、シュロと一緒に最前線でいつの間にか戦っていた。

「 つつても到着するまであと30分くらいはかかるぞ！どうすんだ？」

彼は喋りだすと集中力が低下するという欠点から戦闘中での発言は禁じてあった。

だがこの状況ではそうも言つてられない。モクレンの指摘ももっともだ。

「 しょうがない、一時撤退するぞ！」

イスカ、そのこの平屋の建物の扉を破壊するんだ。俺が入り口でゴーストを始末するから二人は休め。

10分毎に役を交代する。あの入り口なら1対1で戦えるだろう。だがみんな無茶するなよ」

4人目の隊員、ヒソカを信じて撤退命令を出す。

また銃の設定を変え、イスカが今度は扉に向けてグレネード弾を発射した。こういう時のため、サイ・バスターには工作用の実弾も装填してある。

今度は土煙も混じった白くない閃光を伴った爆発が起こる。

イスカが破壊した扉から、さして大きくない平屋に飛び込んだ。

飛び込んでみると、室内にはほとんど光がなかった。

まともに中を見ることもできない暗さを自覚し、シュロ達は自分達がどれだけ長く闘っていたのかを思い知った。

建物の中は綺麗な外観とは裏腹に、奇妙な臭いにつつまれしけっていた。

「？どうしたんだ。ゴーストが追ってこないぜ？」

モクレンが疑問符をあげる。

見やると、確かにさっきシュロ達がいた最前線でゴースト達は膠着している。

突如、シュロは奇妙な既視感に襲われた。

(前にもこんなことがあったような・・・)

「シュロ、おい！照明弾を使うぞ！いいか？」

自分を呼ぶ声で我に帰ると、イスカが銃をいじりながらこちらを睨んでいる。

モクレンはもう休む体勢に入っていた。

「・・・いや、待て」

シユロは身構えたまま、建物の奥をつぶさに観察した。どこか汗臭さを感じる板張りの内部。

外は白だったが、中はすすけた色になっている。

住民の死体からは一切武装がなかったため、訓練施設ではなく武術か何かの練習場であろう。

暗い・・・時刻通りの暗さだが、どこか違和感がある。

しかもさっきの既視感・・・焦りながらも全神経を周囲に張り巡らせる。

「おいどうしたんだよシユロ・・・」

モクレンが立ち上がりシユロに触ろうとするのをイスカがとめる。

「・・・!!」

突如、奥のほうで何かが揺らめいたのが見えた。

同時にシユロに戦慄が走る。

全て思い出した。あの既視感は・・・!

血液が沸騰したのかと思うほどに熱くなる。

無意識のうちに、シユロは力の限り吼えていた。

あれは・・・! 奴は・・・!!

「おおあああああああ!!!!」

驚く二人の隊員を残し、奥へと駆け出す。

揺らめきが前へ進み出、正体を現した。

ゴーストだった。しかし他と変わりなく見える。

「おい、シユロ！焦るな！！ただのゴーストに全力出してどつするんだ」

イスカの静止もシユロには聞こえない。

ゴーストの元へ走りよると、一度右へ体を振り、ゴーストの側面へ踏み込んだ。

左フックで体をこちらに向けると本命のアップパーを叩き込む。

ヒットはしたもののゴーストは手でシユロの拳をさえぎっていた。

カスただけでダメージを与えることはできず、ゴーストも動き出す。

鋭い蹴りをすんでのところで体さばきでかわし、シユロも足刀を返す。

「・・・なんなんだ、あのゴーストは・・・どつやったらあのシユロと互角に闘えるんだ・・・？」

だらりと肩を下げてモクレンがつぶやく。

彼はいつもシユロと訓練している。

「研究用機密特殊部隊：”ツヴァイ”、その中でも？1の戦闘力を誇るシユロの強さは身をもって知っていた。

「12歳のときからこの任務についていたというシユロとあそこまで闘えるとは・・・ただのゴーストじゃないな」

冷静なイスカもこの時ばかりは呆然としている。

ハツとしてモクレンが叫ぶ。

「シユロ！俺も加勢するー！！」

走ろうとするモクレンをシユロが鋭く静止した。

「待て！お前には無理だ！！そこで外のゴーストの動きを見ている」
気がそれた瞬間ゴーストの拳がシュロの顔面をかすめる。
舌打ちしてバックステップし、距離を置いて息を整えると

「こいつは具現化したゴーストだ。」

存在の力を自分のものとして今、この世界のモノとして存在しは
じめたんだ！

2年前、こいつと同じものと闘ったことがある・・・！」
シュロの声に歯噛みしながらもモクレンが立ち止まる。

「外のゴーストはどうやらここまで来ないようだ」
イスカの言葉にホツとしながらもシュロは必死で闘った。

実際このゴーストはシュロと全くの互角だった。一瞬も気を抜くこ
とができない。

得意の足さばきで敵の間合いに侵入しても、黒装束をまとったゴー
ストは引き剥がすような蹴りでシュロを間合いから追い出す。

シュロも素直には下がらず、蹴りを右へ避け、相手の側面に回りこ
み大振りのパンチから足払いのコンビネーションを放つ。

ゴーストのほうは素直に後ろに下がり、胴回しの中段蹴りで襲い掛
かる。

スピードと見切りではシュロが勝り、技とそのタイミングではゴー
ストが勝っていた。

（なんでゴーストがこんなに闘い慣れているんだ・・・！）
口に出す余裕もなく毒づくその間にも疲れを知らないゴーストは動
き続けた。

その3

暗闇の中、二つの影の闘いは続き……そして突如終わりを迎えた。

シュロの足刀がカウンター気味に敵の下腹部に突き刺さった。とどめの一撃を脳天に受け、ゴーストは消えていった。

「さすがにシュロのほう一枚上手だったか」

肩で息をしているシュロに近づき、モクレンが賞賛した。

シュロはゴーストが消えていった先を見つめてしばし黙っていた。よく見れば床は畳が敷いてある。そんな事にも気付く余裕なく闘っていたのか……

「……いや。全くの互角だったよ。見た目通りにな」

否定されたことに驚いて、モクレンとイスカが疑問符をあげる。

「なんでだ？後半はシュロが明らかに押していたじゃないか。結局は実力差だったろ」

「いや……俺がヤツの動きを見切ったからだ。」

具現化していたとはいえ、あのゴーストにはまだ知性がなかった俺の動きをヤツが読んでいたら、どうなったかはわからない」

と、その時建物の奥から大きな音が響いてきた。

「くっ……！まだあんなのがいるってのか!？」

「いや！あれは人の声だ！まさか……」

悲鳴にも似た喚声の正体を確かめに、三人は奥の部屋へ近づいていた。

「増援部隊が来るよ！」

長い髪を後ろで束ねたヒソカが戻ってきた。

ゴーストの力も、銃弾さえも通さない装備に身を包んでいてもなお彼女のスタイルの良さはこの殺風景な戦場でも目立つ。

「・・・？シユロ、その子は一体・・・？」

白い建物を出て、ヒソカ達増援部隊と合流したシユロは。

その肩に小さな男の子を乗せていた。

その3(後書き)

Dear MY Future 第一章これにて完結です。
第二章からこの男の子が・・・。

その1

「 掃討完了しました。ゴーストの沸きはストップした模様です」
増援部隊の、若い隊長（といってもシユロと比べれば年かさである
うが……）が報告にきた。

装備を外す手を止め、シユロは頷いた。

「 うむ、ご苦労。いい手際だったな。新設部隊とは思えない連携
だった」

「 ありがとうございます。自分は、シユロ大尉と一緒に闘えただ
けで十分です。」

自分達新米には及びもつかない動きで、感服しました。

今回もすばらしい活躍でしたね」

興奮した様子で瞳を輝かせ、早口で賛辞を述べる隊長から顔をそむ
け、周りを見回しながらシユロはつぶやいた。

「 ……それでも誰も助けられなかったな……」

戦闘が終結し、静けさを取り戻した山奥の白い街は……あちこち
に死体が散らばっていた。

戦闘中は気にしないようにしているが、改めて現場を見ると、
外傷もなくただ眠るように死んでいる人達。

彼らは、本当に何の表情もなく倒れている。ゴースト現象を初めて
目の当たりにして、恐怖に怯える顔すらない。

精神力を吸われ表情を作り出す力すらないほどに衰弱して死に至る
ためだ。

増援部隊隊長は、シユロにつられて街の人々の様子を見た途端顔面
を蒼白にして目を閉じた。

何の恐怖もなく、無表情な死に顔はむしろ見る者に恐怖を与える。しかしゾツとしながらもシユロを気遣って、カラカラになった喉からなんとか言葉をつむいだ。

「・・・あなたのせいではありません。予報が外れたのです、しようがありません。」

シユロ大尉は、これまで多くの人々の命を、ゴースト現象から守ってきたのです。

しかも誰にもその存在を知られることなく。自分は尊敬していません。どうか気を落とさずに・・・」

「ありがとうございます。・・・遺体の処理は任せる。隊員の疲労が激しいので看護車に乗って先に帰還する」

遺体の処理を任せられ、さらに顔色が悪くなった隊長は、敬礼をひとつしてから部下をまとめはじめた。

ゴースト現象の恐ろしさは、現場を目の当たりにして初めてわかる。予報、処理方法が既に確立されているにもかかわらずアインスがこの現象を一般人に隠すのはこのためだ。

予報が当たれば事前にツヴァイを配置し、住民には適当な理由をでっちあげて避難させるだけで済むが

今回のような事態が起きればまず間違いなく人口の100%が死滅する。All or Nothingなのだ。

そしてこの街は・・・

シユロは何もかも、心までもが白くなっていつてしまうような死の街に背を向け、歩き出した。

その2

「そういえばあの時、他のゴーストが建物内に進入してこなかったのはなんでだろうな？」

看護車の中、イスカがくつろいだ姿勢でシユロに質問する。

建物内にいた男の子をヒソカとモクレンがあやし、シユロは怪我の手当てをしていた。

イスカの質問に、医者 of 診察を受けながら肩越しにシユロが答えた。

「あの具現化していたゴーストが、建物の周りの存在の力を吸収し尽くしていたからだろう。」

存在の力を吸い尽くすとゴーストはその場から動けなくなると考えればつじつまは合う。

力が吸い尽くされなくなった場所へ立ち入ることもできないんだろう。

3015年に起きた最初のゴースト事件でもそれを利用して鎮圧したんだろうな」

淡々と自説を説き、最後にやや沈鬱な調子でシユロは付け加えた。

「・・・つまり俺達はそんな程度の事もわからずにゴーストと闘っているんだな」

看護車が沈黙に包まれた。4人とも自分に課せられた任務の重さを今さらながら痛感した。

診察を終えてシユロが服を着込んでいると、ヒソカが無理矢理明るい声をあげた。

「でも今回もシユロの大活躍で無事鎮圧できたってことじゃない。

具現化したゴーストなんて私見た事ないのに！」

大袈裟にはしゃぐヒソカを見て、モクレンも身乗り出す。

「ああ、すごかったよ。」

互角だとか危なかっただとか言うけれど、最後は一撃で戦闘不能だったもんな」

「私もそれだけ強くなれたらなあ」

彼女は自分の槍、ソウルランスをもてあそびながら口をとがらせた。精神力は扱いが複雑なため、ツヴァイの武器はその形態を大きく退化させざるをえなかった。

もちろん、精神力の未熟な男の子に触らせるのは危険なため今度はイスカが肩車している。

「ふふ・・・帰ったらもつと厳しくしごいてやるか？」

シュロが笑顔を見せる。イスカやモクレンもしかめつつらを返しながらもどこか楽しそうにしていた。

任務の後はどうしても神経がとがってしまつが、普段はこんな楽しいチームだ。

辛い任務もこのメンバーならこなしていける。シュロはこの日初めての笑顔を3人と分け合うように楽しんだ。

車は高地をくだり、既に平坦な街の道路をへりポートへと進んでいた。

「・・・あゝしかしなんだ、えーと」

モクレンがもごもご口を動かしている。彼には珍しく言葉を外に出すのをためらっている。

「どうした？モクレン」

シュロが聞く。モクレンが話しやすいように軽い調子で声をかけている。

「ああ、ええと・・・すごいよな、シュロは」

「ん？」

「あのゴーストなんて、俺は手も足も出なかっただろうな。」

シュロが止めてくれなかったらあつという間ににやられてたかも

知らない」

「・・・何が言いたいんだ？」

モクレンがいいにくそうにしている理由がわからずに、今度はシュロが聞いた。

「私達と歳は変わらないのに、シュロは抜きん出てるわよね」
ヒソカが察して話をつなげた。

さらにモクレンが言いたかった事を代弁する。

「・・・キャリアの差よね。」

シュロは12歳のときからこの任務についてたつて聞いている・・・

・・・なんでなのか聞いても・・・いい？」

普段から聞いたかったことなのだろう。

ヒソカもモクレンも、イスカまでもが遠慮がちにシュロをじつと見つめている。

シュロは男の子を複雑な目で見つめていたが、やがてポツリと言った。

「・・・みんなには・・・いずれ話すことになるだろうな。今は・・・

・まだ整理がついてない」

さつきよりも重い沈黙が訪れた・・・シュロも辛い。

自分のことを隊長ではなく、名前で読んでくれる部下達は信頼しているが、この事実を伝えるのは・・・。

「・・・この子・・・どうなっちやうのかな・・・」

窓の外を見ながらヒソカがつぶやくのが聞こえた。

その3

「すまなかつたな、予報が外れたか」

ツヴァイの本部に戻ったシュロ達を、彼らの直接指示を与える立場にある”アインス”のツゲが迎えた。

本部は、秘密特殊部隊であるにも関わらず、アインス本部の中に堂々とあつた。

アインスはそれぞれの部門の専門家の中から、さらに身分証明や厳しい試験などを経て全てのプロフィールを公開した上で選ばれるエリート集団になっていた。

しかし機密性は高く、人のプロフィールは公開されていても研究内容は秘密にすることができた。

また事実上、研究の後始末を押し付けているアインスはツヴァイに対して負い目がある。

出来る限りの待遇をし、ツヴァイとの連携を深める意味もあり本部を同じくしていた。

「ああ、だがおかげで収穫があつたよ」

シュロは標準装備についているマイクロカメラのディスクをツゲに手渡した。

「ゴーストの活動停止か。」

仮説としてなら今まで有力なものだつたんだがな。これで証明されるな、「ご苦労様」

ツゲの言葉を聞いて、モクレンがくつてかかった。

「ちよつと待てよ、仮説として出てたんならなんで俺達に知らせなかつたんだよ。」

存在の力を吸い取り終わつたら活動を停止することがわかってい

れば作戦を立てるにもかなり楽になったはずだろう」

広々とした講義室のような作戦室に、声が響く。

「仮説を信じて命を賭けることは愚かな事だと思わないか？

ゴーストそのものを研究することはできない。

証明もできなかったし、それを伝えて君達が油断するのは避けたかったのだ」

モクレンの詰問をさらりとかわしてツゲは続ける。

「隠していたわけじゃないんだ。君達のためだよ。そうっつかかってくれるなモクレン」

「しかし・・・！」

ガチャリ

モクレンはまだ何か言おうとしたが、作戦室の扉の音に止められた。扉の向こうから入ってきたのは、先日の作戦で増援部隊としてシユ口達を助けたあの隊長だった。

続いてツヴァイの隊員が次々に入ってくる。

「全員集まったか。じゃあ始めよう」

ツゲがモクレンから目を離し、教壇へ向かった。この作戦室は実際の講義室としても使われる。

当然、ツヴァイ隊員に対するゴースト現象の説明だ。

「今回、シユ口大尉の第二部隊の任務中、重大な事実が判明した。まだデータ解析が途中であるため確実な事は言えないが、ゴースト現象は存在の力を吸収しつくすと

一時、その進行を停止するようだ」

ツヴァイ隊員が全員席についた後、ツゲが講義を始めた。

元々作戦司令室ということもあり、ツヴァイ隊員にとっては自分の

命に関わることであることも手伝って、場は真剣そのものであった。
「皆、知つての通り、ゴースト現象は精神波武器による攻撃でそれ以上増えることを抑えるという形の消極的な対処法しかない。

つまり自然にゴーストの出現が止まるのを待つしかない。

先の研究でゴースト現象が続く時間・量はその土地に住む生物の量に比例して増えていくということがわかっていたが

どれほどの沸きであろうとも闘い続けなければならなかった。長ければ4時間ずっと戦闘状態が続くこともある。

だが今回の発見により作戦の幅はひろがるはずだ。

ゴースト出現地の予測が外れ、その沸きが予想よりも激しいと思われる場合、しばし時間を置き交戦することが望ましい」

隊員の間にはざわめきが起こった。いずれも百戦錬磨の、いわば戦闘に関するエリートだけで構成されているツヴァイだが

やはり命は惜しい。危険な状態に陥ったときに撤退命令が下せるか否かで、生存率は断然違うだろう。

「しかしその場合、これも今回シュロ大尉からの報告にあった存在の力を吸収しつくした具現化ゴーストに注意しなければならぬ」ツゲが一旦口を動かすのをやめ、後ろのスクリーンにシュロのデータディスプレイの内容が映し出された。

シュロの動きを見て、感嘆の声を漏らす隊員達の中で、シュロだけはゴーストの動きだけを修行僧のような面持ちで見つめていた。

あれ以上力を蓄えたゴーストが現れたらどうすれば・・・そう考えると周りからの羨望の目なんか気にしてはいられなかった。

「見ての通り、すさまじい戦闘力だ。

その他のゴーストは、通常のものよりは強いが警戒していれば問題は無いだろう。

この一体が独占して存在の力を吸収した結果だと思われる。だが我々の見解では、これは具現化したゴーストではない」

シュロがハツと顔を上げると、周りの隊員のざわめきも大きくなっていた。

ゴーストが存在の力を吸収し、それによって戦闘力が上がるのは隊員達もみんな気付いていることだった。

だが存在の力を吸収しつくすとどうなるのか・・・それも、あの作戦以来シュロの頭から離れない疑問だった。

「これは、データから解析したところまだ具現化といえるほどのレベルではなく、いまだ精神体のゴーストだ」

確かに映像を詳しく見てみると、ゴーストの足が畳からたまに浮いて見えたり、逆に沈んでいるように見えるときもある。

いままで静かに聞いていたシュロだが、たまりかねて手を挙げた。

（・・・あれ以上のものが出てきたら俺は勝てないかもしれない・・・多分他の誰にも）

「じゃあゴーストが完全に具現化したらどうなるんだ？」

質問を聞いて、全隊員の視線を浴びたツゲは、一呼吸置いてから再び説明しはじめた。

「・・・ゴーストが完全に具現化することはないはずだ。

皆、勘違いしているかもしれないがアレはただの現象だ。災害だ。人間や野獣の形をとって襲い掛かってくるように見えるが、あれはあくまでも精神波。

やつらが吸収しているのを仮に存在の力と呼んでいるが、今ではあれも精神波を吸い取るにより生物を死に至らしめ

自らの精神波と同調させて強化していると考えられている。

しかし所詮は実体を持たない精神体、理論上今回シュロ大尉と戦ったものより強くなる事はない。

これはゴーストの行動範囲と吸収精神波量との計算によって証明されている」

ツゲの言葉を聞いて、シュロはホツとしたが他の隊員は複雑な顔を

していた。

結局あのゴーストに勝てるのはシユロだけなのが分かっているからだ。それだけシユロの力はぬきんでていた。

「 今回の発見については以上だ、各隊で今後の作戦の立て方について十分参考にしてほしい」

そう言うと、ツゲはデータを鞆にしまい、解散を命じた。

「 あ、シユロ大尉は残ってくれ」

「 ああ・・・わかった。みんな先に戻っている」

シユロは答えてツゲと共に別室へ入っていった。

さっきの事もあって、モクレンはまたツゲに何か言いたそうにしていたが、やがて憤然として作戦室を出ていった。

その4

「何噛み付いてるんだよ、モクレン」

イスカが追いついてモクレンをなだめる。

モクレンとは違って、彼はアインスを信用し、ツゲにもそれなりの恩を感じていた。

「アインスあつてのツヴァイだろ。」

彼らがいなければ俺達は装備を整えることもできないんだ」

「俺は・・・あいつらが間違つた事してる気がするんだ。」

一般人に隠すためにツヴァイに尻拭いをさせてるような連中なんだ、信用できるか」

ツヴァイ本部では、どこでも戦闘ができるように、通路でも戦闘訓練が行われる事がある。

その白く丈夫な壁を力任せに殴りつけてモクレンは吐き出すように怒りをぶちまけていた。

「一般人のために隠してるんだ。知らせたつてパニックになるだけだ。それくらいわかるだろ」

「でも・・・俺はこの世の中のために戦いたいんだ。」

そのために軍からこのツヴァイに移籍してきた。

一般人を守るために。これじゃあアインスを守るための戦いじゃないか」

いまだ怒りを隠しきれないモクレンを気遣いながら、今度はヒソカが疑問を出す

「私もイスカと同じでアインスは信用してるけれど・・・」

今日はツゲさん、妙にカリカリしてたわね。

いつもはあんなに突き放した言い方はしないのに。

モクレンとも毎回納得するまで話しあってくれるのに今日はすぐ

に帰っちゃって・・・」

「研究の毎日だ。疲れることもあるんだろう。」

ある意味俺達よりも真剣にゴーストと戦っているんだ。研究することによってな。

モクレンも感謝すべきなんだよ」

イスカの説得に、しぶしぶモクレンが黙る。

彼は自分の思想のために軍に入り、そこでツヴァイにスカウトされたのだ。

アインスに従うことに疑問を持つのは当然の成り行きだった。

三人は廊下を歩き、ツヴァイ部隊の屯所にある、各部隊に一部屋ずつあてがわれている談話室についた。

自動扉が三人の”精神波”を感知して開く。

精神波には個人差があり、指紋と同じように区別することができるシステムが既に成立していた。

同様に武器なども登録した精神波を持つ人間しか使えないようになっていた。

イスカなどは精神波がサイ・バスターのシステムにうまく同調し、シュロ、モクレン、ヒソカもそれぞれの武器に合った精神波を持っている。

「それよりも、あの男の子はどうなるんだ？」

談話室は豪華なつくりではなかったが、広く快適なつくりであった。特にシュロ大尉率いるツヴァイ第1部隊は優遇されており、他部隊より広い。

丸いテーブルに乗り、椅子に足を引っかけた状態でモクレンは次の疑問を口にした。

「・・・ゴーストに襲われた子だ。」

アインスが保護することになるだろうな」

イスカの冷静な答を、ヒソカが沈んだ声で肯定した。

「確かに・・・世間に公表するわけにはいかないもんね。」

「かわいいそうに・・・」

イスカがさらに付け加える。

「あのゴースト現象の中生き延びていたんだ。特殊な体質を持つているとしか思えないしな。アインスの研究にも協力してもらったことになるだろう。」

以前にも同じ例があったらしいぞ。赤ん坊がゴースト現象の中で元気に生きていたってな」

「その子は今どうしてるの？」

ヒソカが不安そうに尋ねる。あの男の子のことでもあるので本気で心配しているようだ。

「さあ？俺も知らないよ。話で聞いただけだからな。」

記録を調べればわかるはずだが、ゴーストに関するものだからな・・・俺達にも触れないだろう」

「その子も元気できるといいんだけど・・・」

ヒソカがシュロのいる作戦室のほうを向いてつぶやいた。

「またその話か。ダメな事はわかっているだろう？」

一方、シュロはまだツゲと話していた。

「推薦してくれるだけいいんだ。試験は絶対に通ってみせる。」

俺をアインスの研究チームの一員にしてくれ！」

シュロは必死の形相でツゲに頭を下げていた。ツゲは検討することもなく即答した。

「無理だ。推薦することもできない。」

アインスの新規メンバーは全てマスコミに公開することになっている。いる。

プロフィールもだ」

「そんな事、いくらでも・・・」

「無理だ。ツヴァイの隊員っていう経歴だけじゃない。問題は他にある」

ツゲはシュロの言葉をさえぎって否定した。

さらに、やや声のトーンを下げて続ける。

「・・・お前が世間に出るだけで大変な事になってしまっただ。

何度も言ってきたことだ。わかっているだろう？お前は・・・」

その先は言わずに、シュロをじっと見つめる。

シュロもこれ以上は反論できずにうつむいている。

「お前の人生を決めてしまったゴーストの研究だ。

自分の手で決着をつけたいのはわかるが・・・

お前はツヴァイでがんばってくれ」

なぜかとても暗い、哀れみをも含んだ悲しい瞳でシュロを見ながら肩をたたき、ツゲは後ろを向いた。

ふとシュロは思い出し、ツゲに疑問を投げかけてみた。

「・・・そういえばあの街で俺達が保護したあの男の子はどうなっただ？」

その5

シュンツ

談話室の扉が開き、シュロが入ってきた。

「あ、シュロ。どうだった？あの街で助けた男の子」
待ちかねたヒソカが飛びついてくる。

モクレンとイスカもテーブルを囲んだ椅子に座りながらも、心配そうに見ている。

「ああ、あの子だな・・・」

シュロは自分の後ろを気にしながら答える。

と、シュロの後ろからあの男の子が飛び出してきた。

「ウチの隊で面倒を見る事になったぞ」

その瞬間、隊員全員が固まった。

事態を理解できず、三人一斉にぽかんと口をあけてとりあえず聞き返してみる。

「・・・なんだった？」

「この子、名前はシロー。俺達4人でこの子の面倒を見るとの命令だ」

律儀に詳しい内容を繰り返し、シュロは男の子：シローを前に出す。

「シロー。三つ。」

男の子が可愛くお辞儀をして、自己紹介した。まだ言葉が片言だ。つられてイスカをも含めた三人もお辞儀をした。

「よ、よろしく・・・言葉喋れたっけ？この子」

ヒソカがシローを抱き上げ、疑問を口にする。

「ああ、三歳と言えば言葉をしゃべれて不思議じゃないんじゃないか？」

俺には全然わからないが。

何故か保護したときは喋れなかったが、だんだん言葉を話すようになったらしい」

「ああ、そうか・・・恐怖か何かが原因だったんだろうな」
出てきた疑問はとりあえず解決して、黙る三人。

突然、ハツとしてイスカが立ち上がった。

「って、なんで俺達が面倒見るんだよ！？非公式ではあるが、俺達は軍隊みたいなもんなんだぜ」

シローを軍人にしろって事なのか！？」

それを聞いて、シユロがニヤニヤ笑いながら答えた。

「ははは・・・そうだな。説明不足だった。すまん」

この子の処遇が決まらないからそれまでの間だけ預ってくれとのことだ。

その間この部隊には出勤命令は一切下されない」

シローを用意されたベッドに寝かせるとシユロも3人と同じ丸テーブルを囲んで座った。

「なんだ、そうだったのか・・・てつきりこの子を軍隊として訓練するのかと・・・」

モクレンがホッと息をついて座りなおした。

この男、意外と子供好きなのかもしれないな、とシユロは思いながらあとの二人を見た。

ヒソカも納得した様子でシローの寝顔に見入っている。

イスカは・・・椅子に座ったまま考え込んでいる。まだ納得していないようだ。

シユロを見返してまた質問してきた。

「でもゴーストをよせつけない体質はアインスの研究に役立つんじゃないのか？」

俺達が預かってていいのかな」

「研究はシローの処遇が決まってるからなんだとさ」
シュロが気軽に返答すると、突然モクレンが顔の色を変えて怒鳴った。

「なんだよそりゃ！」

3人の視線が集まるのをしばし待ってから、芝居がかった仕草で足をテーブルに乗せ、悪態をついた。

「ハッ！耐性体質のガキは”二人目”だから研究は後回しでハイもういらぬよってか！」

やっぱりこれがアインスの本音なんだ！

ゴーストの処理は全部ツヴァイに押し付けていればいいと思っただけにしか研究してないんだ。

俺達はやっぱり事引き受け隊としか思われてないんだよ！」

シローが起きないか気にしながら、シュロは静かにモクレンに声をかけた。

「大丈夫だよ、研究のは確かに必要だが」

それよりもシローの心のケアが先だとツゲが言っていた」

一瞬、モクレンはたじろいだだが、その後は大人しく座った。

「む……そうか。ならいい。」

「……すまん」

「いいさ、モクレンのアインス嫌いは相変わらずだな」

シュロは笑った。元々仲のいい、付き合いの長い隊員だ。

意見が違ふことはあってもまたすぐに打ち解けてみんな笑うことができる。

こいつらと一緒にならツヴァイも悪くないか。

アインス入りをまたも断念せざるを得なかったシュロも素直にそう思った。

その6

ひとしきり笑ってから、シュロはふと真顔に戻って、モクレンに聞いた。

「二人目？さっき二人目って言ったよな。何が？」

「シローと同じ体質を持った赤ん坊が過去にいたらしいのよ」

代わりにヒソカが質問に答えた。シローのベットに向かい、うつむいたまま。

シローの事を自分の子供の事のように心配しているだけに、過去の事例が何より気になるらしい。

しばらく面倒を見る事ができるってだけなのに・・・シュロはむしろそのことが気になった。

「ゴースト現象から助けられて、その子それからどうなったのかな・・・」

「元気にしてるだろうさ」

うつむいたままのヒソカにシュロに気軽に答えようと、今度はイスカが口をはさんできた。

「真面目に考えろよ、シュロ。モクレンみたいな言い方で好きじゃあないが

一時だけとはいえ軍隊に子供を預けるようなアインスだぞ、俺達があしつかりこの子の将来に責任を持ってやらないといけない」

「だがこの子のゴーストの力を全く受け付けない体質はツヴァイの軍人としても有用だ

”一人目”の子もゴーストと戦う立場にあるのかもしれない。シローもそうなるべきかもな」

突然、シローを見ていたヒソカがカツとなったのか、振り向いてかみついてきた。

「シローにそこまで要求するつもり！？」

ゴーストに襲われたからってその後の人生まで決められるわけな

いでしょ！」

「シローにとつても、一人目のその子にとつてもゴーストは自分を孤独にした憎い敵なんだ！」

自分がどんな目にあつてもそれを解明してくいとめたいと思うはずだろ！」

さすがにシユロも我慢できなくなり、テーブルに手をついて大声をあげた。

「一人目」と同じ人生を歩めつていうのも間違つてるわよ！」

この子にはこの子の人生があるの！」

「だが」一人目は「そうやって生きてきたんだ！」

モクレンとヒソカに加えてシユロの怒号も部屋に響き渡る。

叩き付けるように押し付けている拳のおかげでテーブルは真つ二つに割れるかと思うほどきしんでいた。

しかし

「・・・ちよつと待て。シユロ」

一人冷静に話を聞いていたイスカが口を開いた。

「一人目はそうやって生きてきた」だつて？

・・・その子の事を知つていそうな口ぶりだな」

シユロがハツと顔を上げた。

ヒソカとモクレンもそのことに気付き、食い入るようにシユロを見つめていた。

「まさか・・・その子」

「軍人にでもなつてゐるつていうのか・・・？」

ヒソカとモクレンが真つ青になつて呆然とつぶやいた。

二人が可愛がつているシローの将来。

まだ満足にしゃべりもできないこの子にも、そんな重い運命が待っているかもしれない・・・

イスカとシユロも、その事実に関心を暗くしていた。

しばらく、誰も口をきけなかったが・・・

「 シュロ。その ” 一人目 ” について知っているなら話してくれないか・・・本当に軍人になったのか？ 」
意を決して、モクレンが口を開いた。

しかしシュロは黙っている。テーブルに額を押し付けて、なかなか話そうとしなかった。

「・・・シュロっ」

「 あの街で、ゴーストが動かなくなった時な。ああそうかって俺は納得してた」

ふと、シュロが話しはじめたのはシローを助けた街でのことだった。身を起こし、テーブルを見つめながら淡々と、物語でもするように
「 ツゲがあのことを仮説として有力だと言ってた事も俺は以前から知っていた」

たまりかねてモクレンがシュロの体を起こし、額を押し付けるほどに近づけて言った。

「 話をそらさないでくれ。俺達はシローの将来に責任を持たないといけないんだ。シュロだってわかっているだろ？ 」

「・・・あの時もゴーストは止まっ

「 そらすなくて言ってるんだよ！」

モクレンがシュロの体を揺さぶろうとするのを、イスカが止めた。

「 あの時っていつの事だ。シュロ」

「 3015年、ゴースト現象が最初に起こった時だ。俺自身は覚えてはいないんだがな」

「・・・っ！」

三人が揃って立ち上がり、戦慄した。

「 まさか・・・シュロ・・・」

「 そうだ。俺が生まれたのも3015年8月。俺もゴースト現象を生き残った人間の一人だ・・・」

いつもはにぎやかなはずの談話室が、この時ばかりは完全に沈黙に包まれた。

シュロは恐れていた。自分の過去に。

ゴーストに対する意識が他の三人と違うのは元から自覚していた。

イスカとヒソカは一般の人々を守るため。モクレンも同じだが、アインスを毛嫌いしている。

そして自分は、人生のために闘っている。自分の人生を狂わせたものと。

その意識の違いがはつきりしてしまえば、もう一緒に闘う事はできなくなるかもしれない。

それがシュロをためらわせていた理由だった。

沈黙の後、何が起こるか・・・シュロは想像して、ぶるっとな身を震わせた。

「・・・ぶっ」

それが何を表す言葉なのか、はじめシュロには全く理解できなかった。

「 は、はははは！！！！」

それはモクレンの笑い声だった。

モクレンは笑うだけ笑うと、涙をぬぐいながら言った。

「 いや、すまんすまん。それじゃあシュロが鬼のように強いのも

当然だなと思っただけ」

モクレンにつられてイスカとヒソカも笑っていた。

「確かにそうだ。小さい頃からずっとゴーストと戦ってたんだな。色んな意味で……」

「すごいね、シユロは」

口々にシユロを褒めたたえ、今度はシローのベッドを見た。

「でも今日からは他人事じゃないぞ。シユロは勿論だけど、シロ―だってもう俺達の仲間なんだ。ちよつとの間だけだな。」

ゴースト現象の原因をつきとめて、二人を呪縛から解放しないと
な！」

シユロは呆然としていた。こんな反応がくるとは思ってもみなかった……

「みんな……」

安堵と嬉しさで涙がこぼれる。

自分の過去を話したのはこれが初めてだった。

「悪い方向へ考えてたみたいだな。俺たちはそれほど冷たい人間じゃないぞ」

いつの間にかイスカがすぐ隣に来ていた。起きていたシロー肩車して。

「変わらないさ、シユロの過去に何があるって。そのくらいの時間は共有してきただろ？俺たち」

みんながシユロを囲んでいた。モクレンも、ヒソカもイスカもシロ―もみんな笑っていた。

「やるしかないな……」

シユロもつられて笑っていた。

その1

「何みてるの？シュロ」

シュロが振り返ると、青い半ズボンに白の袖なしのシャツという、いかにも3歳児という格好のシローがニコニコして立っていた。

対するシュロも、対ゴースト用の分厚い装備ではなく、ジーンズにラフなYシャツを着ている。

この子を救助してから2ヶ月。

シローの体質の研究はデータを取るだけで頓挫しており処遇はいまだに決まらず、従ってシュロ達ツヴァイ第二部隊には出勤命令が出ることもなく、暇な毎日を過ごしていた。

「ああ、ここ数年のゴースト現象のデータを見てたんだ。

俺達が出動してなかった分もあるから」

シュロがコンピューターの画面から目を離して答えた。シローが最もなついているのはシュロであった。

シュロの背中に飛びつくと、シローは画面を見た。

画面と言っても立体映像、ホログラフになっている。この時代のコンピューターの形はもはやキーボードだけになっていた。

それすらも精神波を利用した思考操作コンピューターの出現により、過去のものとなりつつあった。

扱うデータが膨大なためネットワークに接続していないと使えないのが難点ではあるが。

「あれ、まだOS変えないの？WindowsSP3がだよ」

シュロのYシャツをつかんで、上へ這い上がるうとしながらシロー

が言う。

救助したてのときは、恐怖で口を開くこともできなかったがシュロ達と一緒に生活していくうちにシローは三歳児とは思えないほどの明晰な頭脳を発揮しだしていた。

話す言葉もはつきりしており、詩など朗読させればそれだけでお金を取れそうなほどだ。

「いいんだよ、このままでもなんとか使えるから」

シュロが冷や汗をかきながら言う。早くもコンピュータに関する知識でシローに敗北を喫していたシュロだった。

「しかし・・・増えてるな、ゴースト現象の発生数・・・この二ヶ月で18回も起きてるのか」

「でもどれも山中とか砂漠とか・・・あ、海の中もあるね。何も被害を受けない場所で起きてるから大丈夫だよ」

シュロの頭の上にしがみついてシロー。どうやらここが彼のお気に入りの場所のようだ。

不意に、談話室の扉が開き、声と一緒にモクレンが入ってきた。

「ああ、そのおかげで助かってるようなもんだな。二ヶ月前の任務以来、発生数は増加したが

都市での発生は一つもない。そうでなかったら今頃アインスにマスコミが詰め掛けてるとこだ」

彼は戦闘装備をしていた。白く、分厚い服を着ている。ダウンジャケットのようにも見えるが、対ゴースト用の戦闘ジャケットだ。

精神波を増幅して身体能力を飛躍的にアップする機能も備えている。戦闘ジャケットを脱ぎ、汗を拭きながらモクレンは椅子に座った。

何故か青い顔をしている。

「おう、起きたか。マスコミに騒ぎ立てられるべきだと思ってるんだらう？モクレン」

シュロは笑いながら振り返って言った。

水を飲みながらシローを乱暴に抱きしめ、モクレンは真顔で頷いた。
「ああ、そうだな。それだけの数起きてるんだ、いい加減一般にも警告しておくべきだ」

モクレンの汗臭さに閉口して、シローがシュロのところへ戻ってきた。

「いいからさっさとシャワー浴びてこいよ。シローが嫌がってるぞ。」

頬も腫れ上がってるから手当てしとけよ」

再びシローに背中を登られながら、シュロがシャワールームを指差した。

「けっ、叩きのめした本人が言うセリフかよ」

「訓練に誘ったのはお前だ」

「失神したヤツをほっという勝手に着替えてパソコンいじりなんかするか？普通」

モクレンはぶつぶつ言いながらシャワールームへ消えていった。

再びホログラフの世界地図に目を戻すと、シュロはゴースト発生地点と日時のチェックをはじめた。

「ほとんど全世界だな・・・ここ二ヶ月ではツヴァイ本拠地に近い場所で起きてるから救いはあるが・・・」

またいつ人が住む場所で起きるかわからんな、これじゃあ」

世界地図に表された丸い点は、どこも戦闘員を配備しやすい地点であり、住民もいないような場所であった。

が、謎の自然現象に都合のいい場所で起こることを期待するわけにはいかない。

「だが、ここ二ヶ月では北半球でしか起こっていないな・・・発生場所が絞られてきている？」

シュロも馬鹿ではない。アインスのゴースト研究チームに入れてくれと言っただけあってIQは高くデータ解析能力に長けていた。

ただし機械には何故か弱い。今年も、シュロが使っていた二台のコ

ンピュータが意味もなく壊れた。

「ま・・・でもこんなところかな。データ見てるだけじゃ解明なんてできるわけないか」

コンピュータのスイッチを切ろうとするシュロ。

ふいに、シローが画面を指差して言った。　　シュロの頭の上から。

「なんでだろ？ゴースト現象ってほとんど土曜日と日曜日に起きてるみたいだよ」

「・・・あ、確かに・・・」

日付を確認し、スイッチを切る。確かに、ほぼ全てが土日に集中していた。

シュロを頭に乗せたまま昼食のために扉に向かい、シュロは小さくぼやいた。

「・・・まさか、な・・・」

その2

「ツヴァイ全隊員、作戦司令室に集合せよ！」
大音量で、滅多に使われることのないツヴァイ本部全館放送を聞いたのは、シュロが隊員＋シローみんなで昼食をとっているときであった。

「私達も？」

ヒソカがパスタをからめたフォークを置いて首をかしげる。

「そうだろうな。シローは静かな子だし、作戦室に連れて行っても大丈夫だろ」

と、気軽にシュロ。

「ま、どの道俺達に出動命令が出ることはないんだ。いかなくてもいいんじゃないか？」

と、やる気なさげに言うイスカはリゾットを食べていた。

「ま、一応行ってみよう。俺達はツヴァイだ」

作戦司令室についたシュロ達を迎えたのは、異常に殺気立った隊員と、それ以上に目もあてられぬほどに狼狽したツゲの姿であった。

「ああ、シュロ！すまないがお前達も出撃してくれ！」

そのまま首を絞めにくるんじゃないかと思うほどの勢いで突進してきて、ツゲはシュロの肩をつかんだ。

「どうしたんだ、ツゲ？」

状況がつかめず、シュロが尋ねると、ツゲは今度は顔を近づけてきた。

勢い余って頭突きをくらい、シユロがうづくまるのも目に入らない様子で、狼狽しきったツゲは叫んだ。

「どうもこうも、ゴーストが発生するんだよ！」

「・・・いつもの事じゃないか。」

最近は何とんど毎週とっていいほどの発生数だな」

と、シユロを助け起こしながらイスカ。

「違う、そうじゃない！」

「・・・発生しないのか？」

いつもは冷静なツゲがこの時ばかりは混乱していた。

矛盾するツゲの言葉が何を伝えたがっているのかなか理解できずにシユロ達は首をかしげた。

「落ち着いてよ、ツゲさん。他の隊員もみんなパニックになつて
るみたいだから、あなたが落ち着いて指示出さないと大変な事にな
っちゃうわよ？」

ヒソカがツゲの顔を覗き込むようにしてなだめている。

同時に、シローがビクンと体を震わせた。

シローは検査だの何だのと言って連れまわしていくこの男の事を嫌
っており、今日もモクレンの足にしがみついて前に出ようとしなか
った。

だがツゲの顔から何かを感じ取ったのだろうか、恐る恐る口を開い
た。

「もしかして・・・ここに出るの？」

「ここ？」

するとその言葉に反応して、ツゲが半ばヤケになって叫んだ。

「他に何があつてこの俺がこんなに慌てるっていうんだ！？」

そうさ、ここ、この街、この世界の中枢”セントラル”にゴース
トが出現するっていう予報が出たんだ！今度は間違いない！！」

「！！！！？」

ツゲの慌てぶりに呆れていたシュロ達の目が大きく見開かれた。アインスの本拠であり、ツヴァイの本部であり、全世界の首都である地球最大の都市”セントラル”。

一昔前であれば、考えもしないほどの巨大さである。

この街にゴーストが出現するとなれば被害は尋常ではすまない。

この巨大都市には1億を超える人が暮らしていた。

アインスの本部も巨大な研究施設だが、それを支える住居、交通網、経済全てが揃った街が必要になった。

世界が一つになったのだ、全ての国の首都も一つに重なったようなもの。”セントラル”はまさに全ての中枢となっていた。

そこにゴーストが出現すれば・・・

「一般市民はどうする!?!」

「予報ではゴーストは午後4時頃。ブロック10と1、アインス本部、ここにも出現する。」

ブロック10までの市民には既に避難命令は出しているが、時間ギリギリなんだ・・・!!」

「くっ・・・!!」

うなつて爪をかむシュロ。ツゲが慌てるのも無理はない事態だった。

「っ! シロー!!」

突然、イスカが叫んだ。

シローは顔を真っ青にして、床に倒れていた。

「シロー! どうしたんだシ・・・」

「動かすな! ここは触らずにすぐに医務室へ運んだほうがいい!」不意に冷静になったツゲが指示を下した。さすがに事件を目の前にとらえると判断は早いらしい。

戦闘準備のため騒がしく行き交う隊員を押し分け、シュロは医務室へ走った。

未曾有のゴースト事件を目前に控えて、殺気立っている隊員もシユ口の顔色を見て次々に道を開けた。背負ったシローの体を動かさないよう、細心の注意を払いながら全力で医務室へ向かった。

走りながら、シユ口は猛烈に後悔していた。またしても迂闊な事をしてしまった。

シローが倒れた原因ははっきりしていた。

「・・・考えてみればシローはゴーストに、両親も友達も、自分が生まれ育った街全てを奪われたんだ・・・」

同じ境遇の俺がそれに気付かないなんてな・・・」

「この子の前でゴーストゴーストって連発するなんて、俺達は・・・俺はなんて無神経だったんだ・・・！」

天才とはいえ三歳の子供の、その心に負った傷はあまりにも深かった。

それを対ゴースト部隊と一緒に暮らしていればそのうち慣れるだろう、などと考えていた自分を、シユ口達4人は心の底から恥じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6178s/>

Dear My Future

2011年10月8日21時33分発行